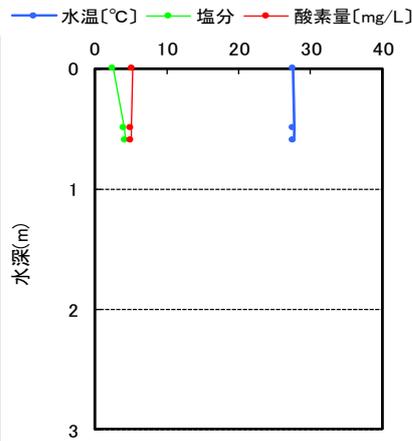
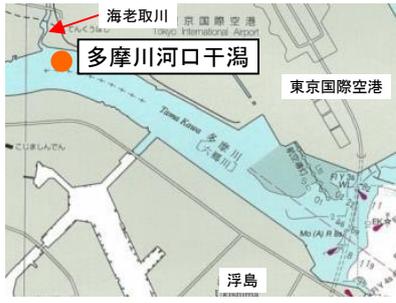


東京都内湾水生生物調査

地点名	多摩川河口干潟	調査年月日	平成30年8月28日	13:15 ~ 14:15
-----	---------	-------	------------	---------------

<調査地点>



<底質状況、底生生物出現状況>



多摩川左岸側(東京都側)の海老取川河口付近の干潟で調査を行った。(多摩川の水際から北方向を望む)



下流川では羽田空港と川崎市を結ぶ「羽田連絡道路」が整備中(完成は2020年度)。

*写真のスケール1目盛:1mm



底質はシルト(柔らかい泥)が混じった砂であった。フルイでふるうと、貝殻片が多く混じっていた。



多摩川河口干潟では、様々な大きさのヤマトシジミが採取された。稚貝もみられ、稚貝の新規加入が起きていることを確認できた。



殻長5cm程度になる。淡水の影響の強い干潟の砂底から砂泥底に、やや深く潜って生活する。殻は白色半透明で、非常に薄く壊れやすい。

<周辺の状況>



体長2cm程度で、細長い円筒形の体をしている。体色は白地で、褐色の斑紋がある。砂～砂泥質干潟の表層部分に巣穴を掘って生活す



穴のそばで息をひそめて待っていると、ヤマトオサガニが出てきた。甲幅4cm程度になり、柔らかい水分の多い泥干潟に斜めの穴を掘って巣穴を作る。

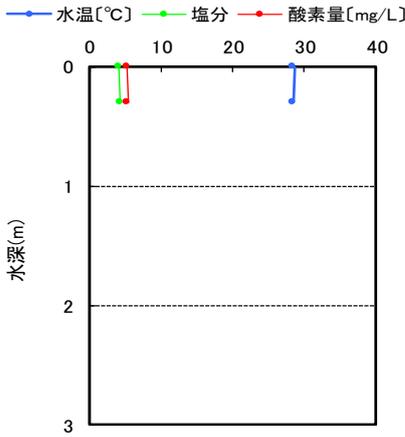


甲幅3～4cm程度。日本全国に分布し、河口の転石の下、カキ殻の中、護岸の隙間などに生息する。オスのハサミの付け根に、毛の房がある。

東京都内湾水生生物調査

地点名	St.31(多摩川河口)	調査年月日	平成30年8月28日	12:28 ~ 13:03
-----	--------------	-------	------------	---------------

<調査地点>



<底質状況、底生生物出現状況>

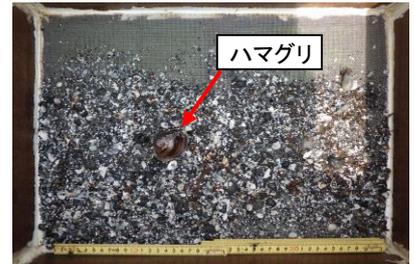


多摩川河口から1.5km付近の浅場であり、干潮時には川の中に立ち込むことができる。調査時の水深は60cmであった。(調査範囲の北側から南方向を望む)

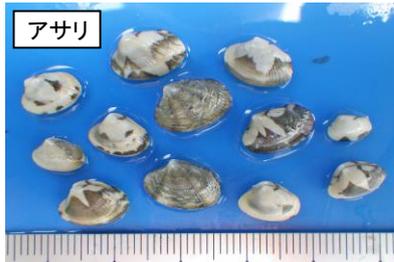


底質はシルト混じりの細砂で、臭いはなかった。

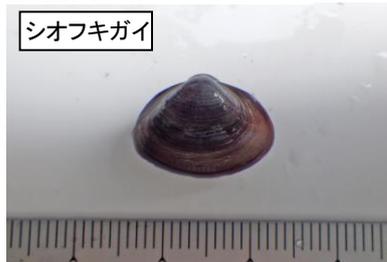
*写真のスケール1目盛:1mm



フルイに残った試料。砂のほとんどはフルイの目合(1mm)を抜けてしまい、貝殻片が残る。



アサリ
殻長4cm程度になる。東京湾のものは形が細くて、模様のコントラストが強いものが多い。この地点では小型の個体が多く採取された。



シオフキガイ
殻長5cm程度になる。砂質底の潮間帯から水深20mほどに生息する。殻の色は、白色から紫褐色まで変異が多い。砂吐きが悪いので、食用としてあまり利用されない。



ハマグリ
殻長8cmを超える大型種。殻は丸みを帯びた三角形で、表面に光沢がある。東京湾では20世紀の終わりには絶滅したと思われていたが、近年は再び目にするようになった。



ホンビノスガイ
殻長10cmを超える大型種。今回採取されたのは稚貝。北米原産の外来種で、殻は白色。稚貝の頃は、同心円状の肋(隆起線)が特徴的。東京湾の湾奥の泥底やカキ礁周辺で多く見られる。食用となり、味は美味しい。スーパー等でも目

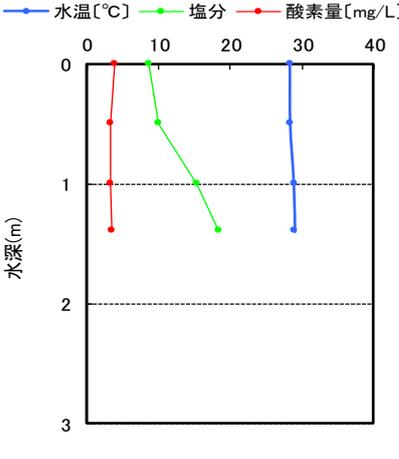


ヒメシラトリ
殻長3cm程度になる。淡水の影響の強い内湾奥の砂底に深く潜って生息している。水管を出して海底上の堆積物を吸い取って食べる。

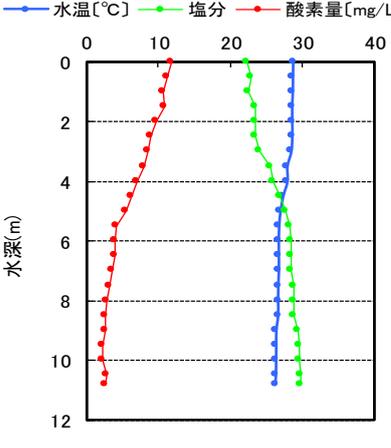
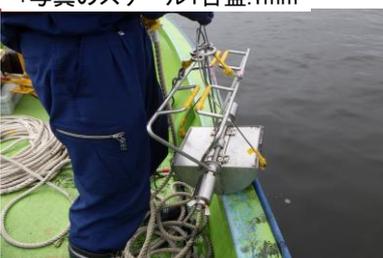
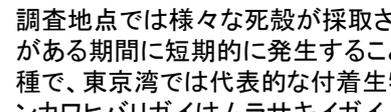
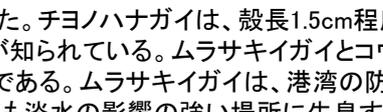
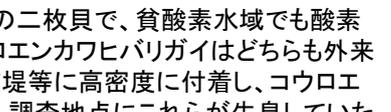


マテガイ
細長い筒型の形状をした二枚貝で、大きい個体では殻長10cmを超える。生きている貝は、砂底に30cm以上深く潜っている。水管は輪が重なったようになっていて、刺激を受ける

東京都内湾水生生物調査

<p>地点名</p>	<p>森ヶ崎の鼻</p>	<p>調査年月日</p>	<p>平成30年8月28日</p>	<p>11:08</p>	<p>～</p>	<p>12:06</p>
<p><調査地点></p>		<p><底質状況、底生生物出現状況></p>				
		  <p>羽田空港の北側に残された干潟。干潮時でも周りは「海」に取り囲まれているため、歩いて入ることはできない。(調査範囲の東側から西方向を望む)</p> <p>採取地点の底質は細砂であり、シルトはほとんど混じっていないかった。</p>				
		 <p>干潮時に出現する干潟は、水鳥の休憩場であり、餌場でもある。様々な生き物が干潟を利用している。</p> <p>*写真のスケール1目盛:1mm</p>				
		<p>ヤマトシジミ</p> 		<p>ヨコエビ類</p> 		
<p>フルイに残った試料。貝殻片が多く混じっていた。</p>		<p>殻長4cm程度になる。河口干潟など淡水の影響の強い、砂底から泥底に生息する。日本産シジミ類でも普通に食されているシジミである。</p>		<p>体長1cm程度の小型の節足動物。干潟で石を持ち上げてみると、石の裏側を、体を横にしてはい回る姿をみることができる。</p>		
<p>紐形動物門</p> 		<p>ミズヒキゴカイ</p> 		<p>Armandia属(オフェリアゴカイ科)</p> 		
<p>ひも状の生物で、とてもちぎれやすい。ミズ類のような縞模様や、ゴカイ類のような「毛」は持たない。肉食性で生きた多毛類などを捕らえて食べる。</p>		<p>砂泥干潟や浅瀬の海底に潜り、細い糸のような鰓と触手を水中に伸ばしていることが多い。かなりの汚染域にも出現する。鰓と触手が水引(祝儀袋等に用いられる飾り)に似ていることから、この名前がついた。</p>		<p>砂地の干潟に浅く潜って生活している。体の横側に黒い眼点が並ぶ。</p>		

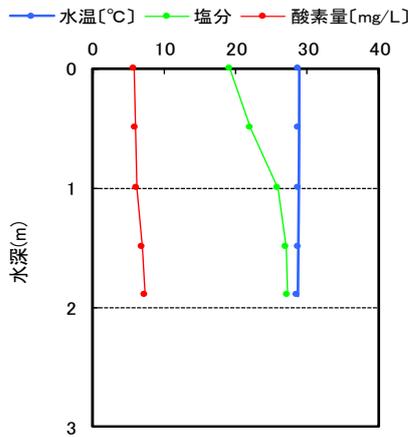
東京都内湾水生生物調査

<p>地点名</p>	<p>St.6</p>	<p>調査年月日</p>	<p>平成30年8月28日 10:10 ~ 10:47</p>																																		
<p><調査地点></p>		<p><底質状況、底生生物出現状況></p>																																			
		 <p>東京港フェリーターミナルの正面で採泥。航路であるため、水深は11.8mと深い。海底付近の酸素量は1.2mg/Lと貧酸素状態(2.0mg/L以下)となっていた。(調査範囲の南側から北方向を望む)</p>																																			
 <p>● 水温[°C] ● 塩分 ● 酸素量[mg/L]</p> <table border="1"> <caption>水深(m) vs. 水温[°C] / 塩分 / 酸素量[mg/L]</caption> <thead> <tr> <th>水深(m)</th> <th>水温[°C]</th> <th>塩分</th> <th>酸素量[mg/L]</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>0</td><td>28</td><td>32</td><td>1.2</td></tr> <tr><td>2</td><td>28</td><td>32</td><td>1.2</td></tr> <tr><td>4</td><td>28</td><td>32</td><td>1.2</td></tr> <tr><td>6</td><td>28</td><td>32</td><td>1.2</td></tr> <tr><td>8</td><td>28</td><td>32</td><td>1.2</td></tr> <tr><td>10</td><td>28</td><td>32</td><td>1.2</td></tr> <tr><td>11.8</td><td>28</td><td>32</td><td>1.2</td></tr> </tbody> </table>		水深(m)	水温[°C]	塩分	酸素量[mg/L]	0	28	32	1.2	2	28	32	1.2	4	28	32	1.2	6	28	32	1.2	8	28	32	1.2	10	28	32	1.2	11.8	28	32	1.2	 <p>フルイに残った試料。貝殻片が僅かに残る程度。</p>			
水深(m)	水温[°C]	塩分	酸素量[mg/L]																																		
0	28	32	1.2																																		
2	28	32	1.2																																		
4	28	32	1.2																																		
6	28	32	1.2																																		
8	28	32	1.2																																		
10	28	32	1.2																																		
11.8	28	32	1.2																																		
		<p>*写真のスケール1目盛:1mm</p> 																																			
<p>底質の性状は、シルトであった。海底面は、酸素があるため表面の泥は灰色であったが、泥の中には、酸素が少ないため、黒色であり、硫化水素臭がした。</p>		<p>水深が深く、海底が軟泥であるため、軽めで取り回しのよい採泥器を使用。底泥が満杯で上がってくるため、引き上げ時の重量はかなり重い。</p> <p>生きている生物は、多毛類のスピオオ科のみが確認された。調査時は貧酸素状態であったことから、貧酸素耐性のあるシノブハネエラスピオと考えられる(試料は現在分析中)。</p>																																			
<p>チヨノハナガイ(死殻)</p> 		<p>スピオ科</p> 																																			
		<p>ムラサキガイ(死殻)</p> 																																			
<p>調査地点では様々な死殻が採取された。チヨノハナガイは、殻長1.5cm程度の二枚貝で、貧酸素水域でも酸素がある期間に短期的に発生することが知られている。ムラサキガイとコウロエンカワヒバリガイはどちらも外来種で、東京湾では代表的な付着生物である。ムラサキガイは、港湾の防波堤等に高密度に付着し、コウロエンカワヒバリガイはムラサキガイよりも淡水の影響の強い場所に生息する。調査地点にこれらが生息していたかどうかは不明である。</p>		<p>コウロエンカワヒバリガイ(死殻)</p> 																																			

東京都内湾水生生物調査

地点名	三枚洲(荒川河口)	調査年月日	平成30年8月28日	8:47 ~ 9:44
-----	-----------	-------	------------	-------------

<調査地点>



<底質状況、底生生物出現状況>



荒川と旧江戸川の河口周辺に残された天然の浅場。調査時の水深は2.9mあり、大潮の干潮時でも干出ししない。すぐ横は、東京ディズニーリゾートである。(調査範囲の南側から北方向を望む)



フルイに残った試料。底質は細砂で、1mmメッシュをすべて抜けてしまう。フルイに残った大きな貝殻はアカニシとカガミガイ。

*写真のスケール1目盛:1mm



水深が浅く、海底の表面が固いため、重量のある採泥器を使用。それでも、1回に採取できる底土は、軟泥の地点に比べて少ない。



底質は細砂で、シルト(柔らかい泥)はほとんど混じっていないかった。水深が浅く、海底の表面が固いので、採泥作業は一苦労である。



殻長7cm程度になる。採取された個体は稚貝。殻は白色で殻質はやや厚い。内湾の干潟から水深20mの砂泥底にやや深く潜って生活する。



殻高1.5cm程度になる。殻の表面には粗い粒状突起が並ぶ。干潟から水深3mの砂泥底に生息する。魚や貝の死骸を食べる性質があり、「海の掃除屋」と呼ばれている。



殻長5cm程度の内湾奥の干潟から水深20mまでの砂泥底に生息する二枚貝。アカガイの代用品として食用にされ、殻の表面の筋の数で区別する(サルボウ32本、アカガイ42本)。



釣り餌として利用される。干潟に飛来する、シギ、チドリ類の餌としても大変重要である。